

寺田寅彦

蓄音機





蓄音機



エジソンの蓄音機の発明が登録されたのは一八七七年でちょうど西南戦争の年であった。太平洋を隔てて起こったこの二つの出来事にはなんの関係もないようなものの、わが国の文化発達の歴史を西洋のと引き合わせてみる時の一つの目標にはなる。のみならず少なくとも私にはこの偶然の合致が何事かを暗示する象徴のようにも思われる。

エジソンの最初の蓄音機は、音のために生じた膜の振

動を、円筒の上にならせん形に刻んだみぞに張り渡した錫箔はくの上に印するもので、今から見ればきわめて不完全なものであつた。ある母音や子音は明瞭に出ても、たとえばSの音などはどうしても再現ができなかつたそうである。その後にはサムナー・テーンターやグラハム・ベルらの研究によつて錫箔の代わりに蝟管ろうかんを使うようになり、さらにベルリナーの発明などがあつて今日のグラモフォーンすなわち平円盤蓄音機ができ、今ではこれが世界のすみずみまで行き渡っている。もしだれか極端に蓄音機のきらいな人があつてこの器械の音の聞こえない国を捜

して歩くとしたら、その人はきつとにがにがしい幻滅を幾度となく繰り返したあげくにすごすご故郷に帰って来るだろうと思われる。

蓄音機の改良進歩の歴史もおもしろくない事はないが、私にとっては私自身と蓄音機との交渉の歴史のほうがより多く痛切で忘れ難いものである。

西南戦争に出征していた父が戦乱平定ののち家に帰ったその年の暮れに私が生まれた。その私が中学校の三年生か四年生の時であったからともかくも蓄音機が発明されてから十六七年後の話である。ある日の朝K市の中学

校の掲示場の前におおぜいの生徒が集まって掲示板に現われた意外な告知を読んで若い小さな好奇心を動揺させていた。今度文学士何某という人が蓄音機を携えて来県し、きょう午後講堂でその実験と説明をするから生徒一同集合せよというのであった。これはたしかに単調で重苦しい学校の空気をかき乱して、どこかのすきまから新鮮な風が不時に吹き込んで来たようなものであった。生徒の喜んだことはいうまでもない。おもしろいものが見られ聞かれてその上に午後の課業が休みになるのだから、文学士と蓄音機との調和不調和などを考える暇いとまは



ないくらい喜んだに相違ない。その時歓声をあげた生徒の中に無論私も交じっていた。

校長の紹介で講壇に立った文学士は堂々たる風采ふうさいをしていた。頭はいがぐりであったが、そのかわりに立派な漆黒なあごひげは教頭のそれよりも立派であった。大きな近眼鏡の中からは知恵のありそうな黒い目が光っていた。引きしまった清爽せいそうな背広服もすべての先生たちのよりも立派に見えた。

まず器械の歴史から、その原理構造などを明快に説明した後にいよいよ実験にとりかかった時には異常な緊張

が講堂全体に充満していたわけである。いよいよ蠟管に声を吹き込む段となつて、文学士は吹き込みラツパをその美髯びぜんの間に見える紅あかいくちびるに押し当てて器械の制動機をゆるめた。そうして驚くような大きな声で「ターカイヤーマーカーラア、」と歌いだした。

私はその瞬間に経験した不思議な感じを三十年後の今日でもありありとそのままに呼び返すことができるように思う。その奇妙な感じを完全に分析して説明する事は到底不可能であるが、種々雑多な因子の中にはもちろん緊張の弛緩しかんから来る純粹な笑いもあつた。そこここに実

際クスクス笑いだした不謹慎な人もあつたようであつた。しかしそれは必ずしも文学士その人に向けられた笑いばかりではおそろくなかつたらうと思われる。この講堂建設以来この壇上で発せられた人間の声の中で、これくらい珍しいものはなかつたに相違ない。忠君愛国仁義じんぎ礼智れいちなどと直接なんらの交渉をも持たない「瓜うりや茄子なすびの花盛り」が高唱され、その終わりにはかの全く無意味でそして最も平民的なはやしのリフレインが朗々と付け加えられたのである。私はその時なんとという事なしに矛盾不調和を感じずる一方では、またつめたい薄暗い岩室の中

にそよそよと一陣の春風が吹き、一道の日光がさし込んだような心持ちもあつた事を自白しなければならぬ。

吹き込みが終わつた文学士は額の汗を押しぬぐいながらその装置を取りはずして、さらに発声用の振動膜とラツパを取りつけた。器械が動きだすとともに今の歌がそろそろ出て来た。それは妙に押しつぶされたような鼻声ではあつたが、ともかくも文学士の特徴ある「ラア、」などの抑揚をかなり忠実に再現したので、講堂の中からは自然な感嘆の声とおさえつけた笑声とが一時に沸きあがつた。

この一日の出来事はどういふものか私の中学時代の思い出の中に目立って抜き出た目標の一つになっている。一つにはこの泰西科学の進歩がもたらした驚異の実験が、私の子供の時から芽を出しかけていた科学一般に対する愛着の心に強い衝動を与えたためであろうが、そのほかにまだ何かしらある啓示を与えたものがあるためではないかと思っている。私は今でも事にふれてこの文学士の「高い山から」を思い出す。あの時にあの罪のない俚謡りようから流れ出た自由な明るい心持ちは三十年後の今日まで消えずに残っていて、行きづまりがちな私の心に有

益な転機を与え、しやちこ張りたがる気分にゆとりを与える。これはおそらく私の長い学校生活の間に受けた最もありがたい教えの中の一つではなかつたかと思う。業に疲れ生に倦うんだ時に私はいろいろの形式でいろいろの「高い山」を歌う。そうして新しい勇氣と希望を呼び返すのである。

私にはかなり重大な、しかし他人にはおそらくくだらなく些さ細さいなこの経験を世の教育家たちにささげて何かの参考にしてもらいたいと思っている。

エジソンの発明から十数年の後に、初めて東洋の田舎

の小都会に最新の驚異として迎えられた蓄音機も、いつとはなしに田舎でもあまり珍しいものではなくなってしまう。日曜ごとにK市の本町通りで開かれる市にいつもきまって出現した、おもちやや駄菓子<sup>だがし</sup>を並べた露店、むしろの上に鶏卵や牡丹餅<sup>ぼたんもち</sup>や虎杖<sup>いたどり</sup>やさとうきび等を並べた農婦の売店などの中に交じって蓄音機屋の店がおのずからな異彩を放っていた。

器械から出る音のエネルギーがいたずらに空中に飛散して金を払わない往来の人に聞こえる事のないように、金を払った花客だけによく聞こえるために幾対かのゴム

管で分配されるようになっていた。耳にさした管を両手でおさえ、首をたれて熱心に聞いている花客を見おろすようにして、口の内で器械の音曲をささやいている主人は狐の毛皮の帽子をかぶったりしていた。彼はともかくも周囲のあらゆる露店の主人に比べては一頭地を抜いた文明の宣伝者でもあるように思われた。

私は大道の蓄音機を聞いてみたいという希望をかなり強くもっていたにかかわらず、とうとう一度も聞く事ができなかつた。私の知っている範囲の友だちや市民でこの蓄音機の管を耳にはさんでいるのを見かけた事もなか



った。聞いているのはほとんど皆田舎の田舎から出て来たらしい最も文明と縁の遠い人たちであつた。

大道で蓄音機を聞くという事がたいして悪い事とは思われぬ。りんごをかじりながら街頭をあるくよりも、環視の中でメリーゴーラウンドに乗るよりもむしろいい事かもしれないのに、何かしらそれを引き止める心理作用があつて私の勇気を沮喪そそうさせるのであつた。そのためこの文明の利器に親炙しんしやする好機会をみすみす取り逃がしつつ、そんなこだわりなしにおもしろそうに聞いている田舎の人たちをうらやまなければならなかつた。この

ような「薄志弱行」はいつまでも私の生涯に付きまとい、  
て絶えず私に「損」をさせている。

大道蓄音機が文化の福音を片田舎に広めた事は疑いも  
ないが、同時にあの耳にはさむ管の端が耳の病気を伝播<sup>でんぱ</sup>  
させはしなかつたかと心配する。今ならばフォルマリン  
か何かで消毒するだろうが、あのころそういう衛生上の  
注意が行き届いていたかどうか疑わしい。しかし今日で  
も文化の輸入伝播に付いて来る種々な害毒がかなり激烈  
で、しかもそれを防ぐ事ができないのであるから、耳の  
病氣ぐらいはやむを得ない事であつたかもしれない。

改良を加えた蠟管蓄音機を聞きそこなった私は、音色の再現がどのくらいまで完全に行ったかを経験する事ができなかつた。しかしかなりまで完成に近づいていたには相違ない。種々な楽器の音や特に昔から問題となつてゐる人声母音の組成要素を分析し研究するに適當な材料としてこの蠟管記録が種々に利用された。蠟管に刻まれた微細な凹凸おうとつを巧妙な仕掛けで郭大した曲線を調和分析にかけて組成因子の間の關係を調べたりして声音学上の知識に貢献した事も少なくない。この種の研究は平円盤の発明によつて非常な進歩しんちよくを遂げた事はいうまでもな

い。蠟管記録の寿命はせいぜい千回ぐらいであるのに平円盤の原型の寿命はほとんど永久であると言つてもよい。それでたとえば現在のある国語の発音を記録しておいて百年千年万年の後のものと比較してその変遷を調べる事もできるので、実際そういう目的で保存されている記録がウインナにあると聞いている。

平円盤によつて行なわれた声音学上の実験的研究もたくさんにあつて、今でも続いて熱心な学者がこれを追究している。カルソーの母音の中の微妙な変化やテトラツチニの極度の高音やが分析のまないた俎板に載せられている。そ

れにもかかわらず母音の組成に関する秘密はまだ完全に明らかにはならない。ヘルムホルツ、ヘルマン以来の論争はまだ解決したとは言われないうである。このような方面にはまだたくさんさんの探究すべき問題が残っている。ことに日本人にとっては日本語の母音や子音の組成、また特有な音色をもった三味線や尺八の音の特異な因子を研究するのはずいぶん興味のある事に相違ない。私はこの種の研究が早晚日本の学者の手で遂行される事を望んでいる。

私が初めて平円盤蓄音機に出会ったのは、瀬戸内海通

いの汽船の客室であつたように記憶する。その後大学生時代に神戸と郷里との間を往復する汽船の中でいつも粗悪な平円盤レコードの音に悩まされた印象がかなり強く残っている。船にいくじがなくて、胸に込み上げる不快の感覚をわずかにおさえつけて少時の眠りを求めようとしている耳元に、かの劣悪なレコードの発する奇怪な音響と騒がしい旋律とはかなり迷惑なものの一つである。それが食堂で夜ふけまで長時間続いていた傍若無人の高話がようやく少し静まりかけるころに始まるのが通例であつた。波が荒れて動揺のすさまじい時だけはさす

がにこの音も聞こえなかつたが、そういう時にはまた船よいの苦惱がさらにはなはだしぶりようかつた。

汽船会社は無論乗客の無聊を慰めるために蓄音機を備えてあるので、また事実上多数の乗客は会社の親切を充分に享樂しているでもあろうが、これがために少数の「除外例」が受ける迷惑も少しは考慮の中に加えてもらいたいと思つた事も幾度あつたかわからない。

このような不平を起こすのが間違つていふという事は、その後だんだんに少しずつわかつて来た。汽船の夜の蓄音機はこのごろどうなつたか知らないが、これに代

わるべきさらに強烈なものは今の世上にあまりに多い。いつまでもこのような不平を超越しないでいては自分のような弱い神経をもったものは生存そのものが危うくなるであろう。

汽船の外でも西洋小間物屋の店先や、居酒屋の繩のれんの奥から聞こえて来るのが通りすがりに聞かない事はなかつた。そういうのは大概「金の逃げ出す音」の種類に属するものであつた。しかしそれはこつちで逃げさえすれば追っかけて来ないから始末がよかつた。

蓄音機のラツパというものも私にはあまり気持ちのい



いものではなかった。器械全体の大きさに対してなんとなく均衡を失して醜い不安な外観を呈するものである。一寸法師が<sup>ぼうだい</sup>尨大なメガフォーンをさしあげてどなっているような感じがある。これが菊咲朝顔のように彩色されたのなどになるといっそう恐ろしい物に見えるのである。

グラモフォーンに対する私の妙な反感がいくらか柔らげられるような機会が来たのは私が三十二の年にドイツへ行っていた時の事である。かの地の大使館員でMという人と知り合いになったがその人がラツパのない、小さ

な戸棚のような形をした上等の蓄音機をもっていた。そしてかの地で聞く機会の多いオペラのアリアや各種器楽のレコードを集めて、それを研究し修練してわびしいひとり居の下宿生活を慰めていた。その人の所で私はいい蓄音機のいいレコードがそれほど恐ろしいものではないという事を初めて知った。しかしそれにしても当時耳にする機会の多かった本物の音楽に比べては到底比較にならない物足りないものだという気がした。曲の構想や旋律を研究し記憶して、次に本物を聞くための準備をするには非常に重宝なものであるとは気がついたが、これを

純粹な芸術的享樂の目的物とする気にはどうもなれなかつた。

それで蓄音機と私との交渉はそれきりになつてさらに十年の歳月が流れた。

ある年の十月に私は妻を失つた。やがて襲つて来た冬はわびしいわが家をさらにわびしいものにした。おおぜいの子供をかかえて家内じゅうの世話をやく心せわしいさびしさのうちに年が暮れて正月になった。年頭の儀式は廃しても春はどこやら春らしくて、突きつまつたような心にもいくらかのゆとりができた。三が日過ぎたある

日親類へ行ったら座敷に蓄音機が出ていた。正月の客あしらいかたがたどこからか借りて来たので、私が来たら聞かせようと言って待っていたとの事であった。そこでおとぎ歌劇「ドンブラコ」というのを聞かされた。

この器械はいわゆる無ラツパの小形のもので、音が弱くて騒がしい事はなかったが、音色の再現という点からはあまり完全とは思われず、それに何かものを摩擦するような雑音がかなり混じていて耳ざわりであった。それにもかかわらず私の心はその時不思議にこのおとぎ歌劇の音楽に引き込まれて行った。充分には聞きとり兼ねる

歌詞はどうであつても、歌う人の巧拙はどうであつてもそんな事にかまわず私の胸の中には美しい「子供の世界」の幻像が描かれた。聞いているうちになんとという事なしに、ひとりで涙が出て来た。長い間自分の目の奥に固く凍りついていたものが初めて解けて流れ出るような気がした。

聞きながら私は、うちでも一つ蓄音機を買つてやろうと思いついた。そして寒い雨の日に銀座へ出かけて器械と「ドンブラコ」のレコードを求めて来た。子供らの喜びは一通りでなかった。品物の届く時刻を待ちかねて門

の外へ幾度か見に出たりした。

その夜のわが家はいつになくにぎわった。なんとなしに子供の心を押しつけていた暗い影が少なくともこの夜はどこかへ行ってしまったような気がした。疲れて快く眠る子供の顔を見比べながら雨戸にしぶく雨の音を聞いているうちにいつのまにか説明のできない涙が流れた。

当分の間は毎日子供から蓄音機を蓄音機をと迫られた。子供らはもうすっかり歌詞や旋律を覚えてしまつて、朝起きると床の中からあちらでもこちらでもそれを歌っているのであった。

小学生のよく歌うような唱歌のレコードも買って来たが、それらはとても聞かれない妙な不愉快なものであった。ああいう歌でもちやんとした声楽家の歌ったのならきっとおもしろいだろうと思われるが、普通のレコードのように妙な癖のあるませた子供の唱歌は私にはどうも聞き苦しい。そうかと言って邦楽の大部分や俗曲の類は子供らにあまり親しませたくなし、落語などというのは隣でやっているのを聞くだけでも私は頭が痛くなるようであった。それで結局私のレコード箱にはヴィクターの譜が大部分を占めるようになった。

妙なもので、初めのうちは「牛若丸」や「うさぎとかめ」などを喜んだ子供らも、じきに、そういうものよりは、やはりあちらの名高い曲のいいレコードを喜ぶようになった。きようは「アンヴェイルコーラス」をやれとか、カルソーの「アヴェマリア」をやれとかいろいろの注文を持ち出すようになった。

普通の和製のレコードとヴィクターのと見比べて著しく目につく事は盤の表面のきめの粗密である。その差はことに音波の刻まれた部分に著しい。適当な傾きに光を反射させて見た時に一方のはなんとなくさがさした感



じを与えるが、一方は油でも含んだような柔かい光沢を帯びている。これは刻まれた線の深さにもよる事ではあろうが、ともかくもレコードの発する雑音の多少がこの光沢の相違と密接な関係のある事は疑いもない事である。これは材料その物の性質にもよりまた表面の仕上げの方法にもよるだろうが、少しの研究と苦心によって少なくとも外国製に劣らぬくらいにはできそうなものであるのに、それができていないのはどういう理由によるものか、門外漢にはわかりかねる。しかし私の知れる範囲内では、蓄音機レコードの製造工場へ聘<sup>へい</sup>せられて専心その

改良に没頭している理学士は一人もないようである。もつともこれは別に蓄音機のみに関した事ではない。当然専門の理学士によつてのみ初めてできうべき器械類が、そういう人の手によらずしてともかくも造られているという奇蹟的事実は至るところに見受けられる事であるから。

いずれにしても今の蓄音機はまだ完全なものとは思われない。だれにでもいちばんに邪魔になるのはあのささ、らでこするような、またフライパンのたぎるような雑音である。あれを防ぐ目的で振動膜から発する音を長さ二

十余尺あるいは四十余尺の幾度も折れ曲がった管の中を通過させて試験した人もある。そうすれば雑音の短い音波はかなり消却されるがそのかわり音が弱くなるのは免れ難いし、また同時に肝心の楽音の音色にもいくぶんかの変化を起こすのはやむを得ないようである。そのほかに驢馬ろばの耳の形をしたラツパを使った人もあるが、どれだけ有効であるかよくわからない。しかしこの雑音は送音管部のみならず盤や針や振動膜やすべての部分の研究改良によって除去し得ないほどの困難とは思われない。早晚そういう改良が外国のどこかで行なわれるだろうと

予期される。

もう一つの蓄音機の欠点は、レコードの長さ制限があつて長い曲が途中で中断せられる事である。この中絶をなくするため二台の器械を連結してレコードの切れ目で一方から他方へ切りかえる仕掛けがわが国の学者によつて發明されたそうであるが、一般の人にはこの中断がそれほど苦にならないと見えて、まだ市場にそういう器械が現われた事を聞かない。

音波によつて起こされた電流の変化を、電磁石によつて鋼鉄の針金の付磁の変化に翻訳して記録し、随時にそ

れを音として再現する装置もすでに発見されて、現にわが国にも一台ぐらいは来ているはずである。これならば任意に長い記録を作る事も理論上可能なわけであるが、なんとと言っても電気装置などを使わずに弾条ばねと歯車だけで働くグラモフォンの軽便なものには及ばないわけである。

私の和製の蓄音機は二年ぐらい使った後に歯車の故障が起こって使用に堪えないものになってしまった。近所の時計屋などではどうしても直しきれなかった。もと買った店へ電話で掛け合ったら、取りには行かれないが持

って来れば修繕してもいいという返事であった。買う時には店員まで付き添って雨の降る中を届けて来たのに、それでは少しおかしいとは思ったがどうにもならなかった。しかしはるばる持つて行くのがおっくうなので長い間納戸なんどのすみに押し込んだままになっていた。子供もおしまいにはあきらめて蓄音機の事は忘れてしまったようであった。

ある日K君のうちへ遊びに行ったらヴィクトロラの上等のが求めてあって、それで種々のいいレコードを聞かされた。レコードは同じのでも器械がいいとまるで別物

のように感じられた。今までうちで粗末な器械でやっていたのはレコードに対する虐待であつた事に気がついた。うちの器械で鋼鉄の針でやる時にあまりに耳立ちすぎて不愉快であつたピツコロのような高音管楽器の音が、いい器械で竹針を用いれば適当に柔らげられ、一方ではまた低音の弦楽器の音などがよほど正常の音色を出す事を知つた。

年の暮れに余分な銭のあつたのをヴィクトロラの中でいちばん安いのかえて針も三角の竹針を用いる事にした。同じレコードの中から今まで聞かれなかつたいろいろ

ろの微細な音色のニュアンスなどが聞き分けられるのが不思議なくらいであった。ごまかしの八百倍の顕微鏡でのぞいたものをツアイスのでのぞいて見るような心持ちがした。精妙ないものの中から、そのいいところを取り出すにはやはりそれに応ずるだけの精微の仕掛けが必要であると思った。すぐれた頭的能力をもった人間に牛馬のする仕事を課していたような、済まない事をしていたというような気がするのであった。

鉄針と竹針とによる音色の相違はおそらく針自身の固有振動にも関係するだろうしまた接点の弾性にもよる



だろうが、これらの点を徹底的に研究すれば今後の改良に関する有益なヒントを得られるだろうと思われる。

いずれにしてもまだ現在の蓄音機は不完全と言われてもしかたのない状態にある。三色写真が絵画の複製術として物足りないごとく、蓄音機は名曲のすぐれた演奏の再現器として物足りないものである。それだから蓄音機は潔癖な音楽家から軽視されあるいは嫌忌けんきされるのもやむを得ない事かもしれない。私はそういう音楽家の潔癖を尊重するものではあるが、それと同時に一般の音楽愛好者が蓄音機を享樂する事をとがめてはならないと思う

ものである。

蓄音機でいい音楽を聞くのと、三色版で名画を見るのとはちよつと考えると似ているようで実は少し違つたところがあつちと思ふ。私の考えでは、三色版が色彩に対しても不忠実であるのみならず、画面の微妙な光沢や組織に対し全然再現能力のないのに反して、良い蓄音機では音色や強弱の機微な差別が相応に現われ、そして最も重要な要素と考えられる時間関係がかなり厳密に再現される。そういう点で蓄音機のほうがある意味で三色版より進んでいるとも言われる。ただ困る事には今の蓄音機に

避くべからざる雑音の混入が、あたかも三色版の面にきたないしみの散点したと同様であるようにも思われる。しかし人間の耳には不思議な特長があつて、目の場合には望まれない選択作用が行なわれる。すなわち雑多な音の中から自分の欲する音だけを抽出して聞き分ける能力を耳はもっている。音楽家が演奏をしている時に風や雨の音、時には自分の打っているキーの不完全な槓杆てこのきしる音ですらも、心がそれに向いていなければ耳には響いても頭には通じない。この驚くべき聴感の能力のおかげで、われわれは喧騒けんそうの中に会話を取りかわす事ができ、

管弦樂の中からセロやクラリネットや任意の樂器の音を拾い出す事ができる。

これに反して目のほうでは白色の中から赤や緑を抜き出す事が不可能であり、画面から汚点を除却して見る事はどうしてもできない。

このような本質的の區別がありはするが、蓄音機のあまりにはなはだしい雑音はやはり耳ざわりには相違ない。しかし一つの曲に修熟してその和音や旋律を記憶した後、そのレコードの音を専心に追跡しあるいは先導して行く場合にはかなりの程度までこの選択ができるよう

に思われる。これは修練によつてだれでも自然にできる  
だらうと思われるが、かつてある学者の試みたように蓄  
音機から出る音を壁にかけた反射鏡から一度反射させて  
聞けば、あたかも隣室の音楽を聞いているような心持ち  
がするので器械の雑音の気になる事がさらによく防がれ  
るだらうと思う。

もう一つ音楽家にとつて不満足であろうと思うのは、  
たとえば音色がよく再現できていると言ったところで、こ  
れをほんとうの楽器に比べればどうしてもいくぶんの差  
違のある事は免れ難い事である。いろいろな音の相対的

の関係はかなりによく行っていて、全体にかぶさっている濁りあるいは曇りのようなものがあってそれが気になるだろうと思われる。しかしこれはたとえば同一の絵を少し暗い室で見るとか、あるいは少し色のついた光の下で見るとよく似た事であって、正常の光で見た時の印象が確実に残っていない人にとってはその区別は全然認識されない。もしそうでなかったら曇り日に見たセザンヌと晴天に見たセザンヌ又は別物に見えなければならぬわけである。同じようなわけで八畳の日本室で聞くヴァイオリンと、広い演奏室で聞く同じひき手の同じヴァイ

オリンとも別物でなければならぬ。

不完全なる蓄音機から本物の音楽を聞き出そうとする人にとつてもう一つの助けになるのは人間心理の特徴として知られた補足作用である。自分の文章の校正刷りを見る時に顕著な誤植を平気で読み過ぐすと同じような誤謬ごびゆうが、不完全なレコードを完全に聞かせるに役立つ場合も可能である。

畢竟蓄音機ひつきょうをきらいなものとするか、おもしろいものとするかは聞く人の心の置き方でずいぶん広い範囲内でどうにもなるものだらうと思う。これは絶対的善美な

ものの得られない現世であらゆるものの価値判断に關係して当てはまる普遍的方則ではあるまいか。それで私は蓄音機をきらう音楽家のピュリタニズムを尊敬すると同時に蓄音機を愛好する素人しろうとを輕視する事はどうしてもできない。

蓄音機が完成に近づくに従って生ずる新しい利用方面がいろいろに考えられる中にも、従来すで行なわれていたような音楽や演説の保存運搬、外国語の発音の教授などは別として、たとえば学校の講義のあるものを悉しつかい皆蓄音機ですませる事はできないかという問題が起こる。



学校の講義と言つてもいろいろの種類があるが、その内にはただ教師がふところ手をしていて、毎学年全く同じ事を陳述するだけで済むものもある。そういうのは蓄音機でも代用されはしないかという問題が起こる。それからまた黒板に文字や絵をかいたりして説明する必要のある講義でも、もし蓄音機と活動写真との連結が早晩も少し完成すれば、それで代理をさせれば教師は宅で寝ているかあるいは研究室で勉強していてもいい事になりはしまいか、それでも結構なようでもあるがまたそうではなさそうでもある。こういう仮想的の問題を考えてみ

た時にわれわれは教育というものの根本義に触れるように思う。

私は蓄音機や活動写真器械で置き換え得られるような講義はほんとうの意味の教育的価値のないものだろうと思っ  
ている。もし講義の内容が抜け目なく系統的に正確な知識を  
与えさえすればいいとならば、何も器械の助けを借りるま  
でもなくその教師の書いた原稿のプリントなり筆記なりを  
生徒に与えて読ませれば済む場合もあるわけである。甲の  
講義を乙が述べてもそれでたくさんなわけである。

しかし多くの人が自らその学校生活の経験を振り返って見た時に、思い出に浮かんで来る数々の旧師から得たほんとうにありがたいたつと貴い教えと言ったようなものを拾い出してみれば、それは決して書物や筆記帳に残っている文字や図形のようなものではなくて、到底蓄音機などでは再現する事のできない機微なあるものである事に気がつくだろう。

これはおそらくだれでも知っている事であろうが、あまりに教育というものを系統的科学的従って機械的な研究の対象とする場合にややもすれば忘れがちな事であ

る。一度これを忘れればすべての教育は蓄音機や活動写真で代用する事ができるようになると同時に、教育の効果はその場限りの知識の商品切手のようなものになる。生徒の生涯を貫ぬいてその魂を導き引き立てるような貴いありがたい影響はどこにもなくなるだろう。

十年一日のごとき講義をするといってよく教師を非難する人が往々ある。しかしそれだけの事実では教師の教師たる価値は論ぜられないと思う。講義の内容の外見上の変化が少なくともその講義の中に流れ出る教師の生きた「人」が生徒に働きかけてその学問に対する興味や熱

を鼓吹する力が年とともに加わるといふ場合もあるかもしれない。これに反して年々に新しく書き改め新事実や新学説を追加しても、教師自身が、漸次に後退しつつある場合も考えられない事はない。この二つの場合のどちらが蓄音機のレコードに適するかを一般的概念的に論断するのは困難ではあるまいか。

蓄音機が完成した暁に望み得られることのうちで私が好ましいと思う一つのは、あらゆる「自然の音」のレコードである。たとえば山里の夜明けに聞こえるような鶏犬の声に和する谷川の音、あるいは浜べの夕やみに

響く波の音の絶え間をつなぐ船歌の声、そういう種類のものの忠実なるレコードができたとすれば、塵ちりの都に住んで雑事に忙殺むくされているような人が僅きん少しやうな時間をさいて心は無垢むくな自然の境地に遊ばせる事もできようし、長い月日を病床に呻吟しんぎんする不幸な人々の神経を有害に刺激する事なしに無聊ぶりようを慰め精神的の治療に資する事もできはしまいか。こういう種類のレコードこそあらゆるレコードの中で最も無害で有益でそして最も深い内容をもったものではあるまいか。もしそういうものができたら、私はそれをあらゆる階級の人にすすめたい。為政家が一

国の政治を考究する時、社会経済学者がその学説を組み立てる時、教育者がその教案を作製する時、忘れずに少時このレコードの音に耳を傾けてもらいたい。あらゆる心と肉の労働者もその労働の余暇にこれらの「自然の音」に親しんでもらいたい。そういう些さ細さいな事でもその効果は思いのほか大きいものになる事がありはしまいか。少なくともそれによって今の中がもう少し美しい平和なものになりはしまいか。

蓄音機に限らずあらゆる文明の利器は人間の便利を目的として作られたものらしい。しかし便利と幸福とは必

ずしも同義ではない。私は将来いつかは文明の利器が便利よりはむしろ人類の精神的幸福を第一の目的として発明され改良される時機が到着する事を望みかつ信ずる。その手始めとして格好なものの一つは蓄音機であろう。もしこの私の空想が到底実現される見込みがないという事にきまれば私は失望する。同時に人類は永遠に幸福の期待を捨てて再びよぎる事なき門をくぐる事になる。

(大正十一年四月、東京朝日新聞)







日本文学電子図書館

---

## 蓄音機

著者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底本 寺田寅彦随筆集 第二卷  
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行

---



日本文学電子図書館